

論文審査結果の要旨

氏名 大江朋子

本論文は、社会集団に対するステレオタイプ抑制（ステレオタイプを利用しないように自己制御すること）の動機と抑制方略の効果について、情報処理過程に焦点をあてて実証的に検討したものである。近年の研究では、ステレオタイプ抑制の動機が、判断時におけるステレオタイプの知識の意図的・非意図的な利用に及ぼす影響が検討されている。そのような研究動向を受け、本論文では、第一部で、3つの調査研究を通して、ステレオタイプ抑制がどのようなものを抑制動機と抑制方略を区別しながら包括的に捉え集約している。また、第二部では、3つの実験研究を通して、特定の抑制方略をとることが、その後のステレオタイプの利用しやすさにどのような効果をもたらすのかを報告している。

第一部の調査研究（研究1～研究3）では、抑制動機が偏見否定動機（偏見を否定し個人を尊重しようとする動機）と規範・関係維持動機（社会規範や相手との関係性を維持しようとする動機）に分類でき、抑制方略が回避方略（相手への関与や潜在的な問題状況を回避する方略）と接近方略（相手について積極的に考えようとする方略）に分類できることを実証した。また、抑制動機と抑制方略の関係についての分析から、規範・関係維持動機が回避方略の採用を、偏見否定動機が接近方略の採用を促進することを明らかにした。第二部の実験研究（研究4～研究6）では、ステレオタイプへの接近可能性（ステレオタイプ概念を認知的にどの程度利用しやすい状態になっているか）に焦点をあて、抑制後にステレオタイプへの接近可能性を高める方略とそうではない方略を区別している。実験の結果、抑制後に接近可能性を高める方略は、抑制対象の集団と他の概念との連結に注意を向けない単純な抑制方略であり、ステレオタイプへの接近可能性を高めない方略は、対象集団と非ステレオタイプ特性との連結に注目する抑制方略であることが示された。

これらの調査と実験から得られた知見は、これまで個別に扱われてきた抑制動機や抑制方略を集約したうえで、両者の関係を実証的に提示したものとして、学術的な価値が高いと評価できる。実験で得られた結果の一部について、その背景にある情報処理過程を完全に解明できていないという問題が見られるものの、これまで断片的に行われていたステレオタイプ抑制研究をまとめ、抑制方略の効果を比較検討したことは重要な貢献と認めることができる。

以上のことから、本審査委員会は本論文が博士(社会心理学)の学位にふさわしいものであると判断する。